

大学博物館が取り組む実践的學生教育 —西南学院大学博物館の学芸調査員制度を事例に—

内島美奈子

はじめに

大学博物館は學生教育の場であると同時に、地域の人々の社会教育の場でもあると考えられている。このような考えは社会における大学の役割が変化していくなかで生まれ、現在では大学と地域社会をつなぐ大学の窓口として位置付けられつつある。一方で、教育機関である大学が設置する施設として、大学博物館が學生教育の場であることはその根底にあり、失われることのない役割である。

本稿では、學生教育の場としての大学博物館の役割について考え、西南学院大学博物館による「學生が主役」となる実践的教育の取り組みについて報告をする。

1. 大学博物館の役割の変遷と現在

本章では、大学博物館の役割の変遷をその創設から現在にいたる歴史とともにみていく。

大学博物館設置の歴史 1870～1990年代

日本における大学博物館の歴史は、1870年代にはじまる¹。1870年代に東京大学が付属植物園と列品室を設置した。その後、北海道大学の農学部附属博物館(1884年)、東京農業大学農業資料室(1905年)、秋田鉱山専門学校附属列品室(1910年)など、まずは自然系の博物館の設置が進んだ。そして、1910～1920年代には、京都大学の文学部陳列館(1914年)、私立大学において早稲田大学演劇博物館(1928年)、國學院大學考古学資料館(1928年)、明治大学刑事博物館(1929年)などが設置され、人文系の博物館も増

えていった。これらはまず、大学が有する資料を保管し、学内における研究や教育の場として設置された。当時、大学博物館の設置について棚橋源太郎がその著作のなかで重要性を主張している²。アメリカやヨーロッパでは多くの大学専門学校に実物教育の場として博物館が設置されているのに対して、日本ではその重要性が認識されておらず設置が進んでいないことを指摘し、さらには一般の人々にも公開すべきとしている。研究のために収集した科学・歴史・美術などの多分野における貴重な資料と各専門分野の教員という人材の豊富さから、大学が博物館を設置することはそう難しいことではないとも述べており、大学博物館における先進的な提言であったといえる。

日本において大学博物館の設置が進んだ大きな契機としては、1995年に当時の文部省学術審議会において出された「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」(以下、「報告」)の提言が重要な役割を果たしている。本報告によれば、「大学等の学術標本を整理、保存、公開・展示し、その情報を提供するとともに、これらの学術標本を対象に組織的に独自の研究教育を行い、また、「社会に開かれた大学」の窓口として、人々の多様な学習ニーズに対応できるユニバーシティ・ミュージアムの設置が必要である」とされる。つまり大学が研究・教育のために収集した資料を「学術標本」とし、それらが組織的に整理・保管されていない状況を指摘し、大学博物館を設置することで教育・研究活動に効率的に役立てるべきと提言した。本報告における“社会に開かれた大学の窓口”という表現は、大学博物館の社会教育の場としての役割を強めるものとなったといえる。

これを受けて、1996年に東京大学総合研究博物館、1997年に京都大学総合博物館が設置され、それまで学術標本を保管する場として設立された陳列室や資料館を博物館法に基づく「博物館」として整備した。地方国立大学や私立大学でも「博物館」が設置され、学術標本を整理・保管する、学内における研究・教育の場から学外の人々に公開する場として社会教育機関の役割が期待されるようになっていく³。

大学における社会貢献の場

大学博物館が学内の教育施設としてだけでなく、学外に向けた活動を行う場としての役割は、大学に対する社会の要求が変化していくことに関連している。1995年の報告において、大学は研究成果を地域社会に積極的に発信することが求められており、大学博物館において展示や講演会等を通じて公開することが望ましいとある。報告が出された後、この点において大学側に影響を与えることになったのは教育基本法の改正である。

2006年に改正され、生涯学習の理念が新しく付け加えられるとともに、大学が担う社会貢献についても明文化された。文部科学白書(平成18年度)にもあるように、国際化、情報化、少子高齢化など社会が激しく変化している現在において、その変化に対応できるような能力が人々には必要とされ、成熟社会における余暇時間の充実など、人々が生涯のいつでも自由に学習機会を選択して学ぶことができる社会を実現することの必要性が増している。そのなかで、大学を含む高等教育機関は、大学における研究の成果を社会に発信をすることで、大学が社会の発展に寄与し、さらに生涯学習への需要、地域や職業人からの大学の要請へ応えることが、大学の果たす社会・地域貢献活動として求められた⁴。このような状況から、現在、大学の使命である研究と教育に次いで、第3の使命として社会貢献があることが浸透してきている。その具体的な社会・地域貢献活動の取り組みとしては、「公開講座の開催」「学校外で開催される講演会、社会教育事業への講師派遣」「社会・地域問題への対処や地域活性化活動への教職

員・学生の参画」などがある⁵。

このような状況が大学博物館にとって大きな影響を与えている。大学のキャンパスのなかで、学生以外の人間が利用できる施設は限られている。大学の窓口としての役割を果たすのが大学博物館とされ、大学の社会貢献の役割を担う場所として大学博物館を活用している大学は多いといえる。様々な大学博物館が地域・社会貢献に取り組んでいるなかで、展示活動、講演会などの他、芸術系の大学では学生や教員の作品を発表する場ともなり、市民のボランティア活動の場となるなど、地域博物館と変わらない活動をしている大学博物館もある⁶。

大学博物館の現在

現在、多くの大学博物館では、自治体が設置する地域博物館と変わらないほど地域社会に向けての活動に取り組んでいる。しかし、しばしば指摘されるように、大学博物館には地域博物館とは異なる使命、そして役割があるとされる⁷。資料収集を例に挙げると、地域博物館は地域住民の税金で運営されるため、地域の文化や歴史に関する資料を収集することが基本である。他方、大学博物館は大学の付属施設であり、大学の方針に従った活動を行うため、研究、教育のためであれば、比較的広い範囲で資料を収集することができる。理工系の大学であれば、さまざまな実験にまつわる資料から、将来、文化財となるものが生まれる可能性もある。また、芸術系の大学では、芸術作品が評価されるのには時間がかかるものだが、教員や学生、卒業生の作品を保管し、展示することもできる。地域の伝統工芸を教える大学においても、大学博物館の役割が指摘されている⁸。こうした大学博物館の特色から、日本の博物館に多様性を与える、重要な役割を担っているともいえる。

大学博物館の機能からみると、学術標本の保存・管理に次いで研究教育があるとされる⁹。大学によってその比重は異なるものの、学内における研究の拠点としての役割といえる。また、活動の対象から考えると、大学博物館、特に私立の大学は、学生を第一の対象と考えるべきであり、学生教育の拠点

であるべきとされる¹⁰。黒沢氏は、「大学博物館は第一に学生や大学院生に対する教育および研究のサポートを考えるべきである、と思う。その次に将来大学に来ることが予想される子供たちがいて、そして、一般の社会人が対象となる」と述べ、大学博物館の本来の役割を考えたとき、学生に対する教育は優先されるべきであろうとしている¹¹。有村氏は、大学博物館が学内施設である以上、学生教育の場としての役割は決して失われることのないものとしている¹²。

大学博物館は、その役割を認識し、学内外に向けての活動に取り組むことが現在求められていると思われる。とくに、学生教育の場としての役割を見直し、地域博物館が“市民が主役”を掲げるのであれば、大学博物館は“学生が主役”たる活動を行うべきであると指摘されている¹³。では“学生が主役”とはどういうことを意味するのか、次章で考察する。

2. 大学博物館の学生教育と学芸員養成

“学生が主役”を掲げている大学博物館は多くはない。ここでは、大学博物館が行う「教育」について考え、学生が主役となる取り組みである実践的教育と大学博物館の役割についてみていく。

大学博物館の学生教育

学生教育の場としての役割を考えるにあたって、大学博物館の事例報告の数々をみると、大きく2つの取り組みにわけることができる。ひとつは専門科目や博物館学系の講義における活用であり、もうひとつは学芸員養成の場としての役割である¹⁴。講義の活用としては、棚橋が欧米の例をみても、とくに理工系、芸術系の大学・学部は実物教育の必要性から大学博物館が設置される傾向にあるとしているように、実物教育の場としての講義の補助的な役割を担うものである。ゼミなどの専門教育の講義で見学されるなど、教室で受ける座学形式以外の講義を行う場として活用される。近年では、自校史教育において、大学博物館の展示が活用されることもあ

る。その他、学生が地域の人々と関わる機会をつくる場となる事例も報告されている。香川大学博物館では教育学部の講義として授業連携型ミュージアム・レクチャーの取組みが紹介され、大学生が地域の小学生を対象に大学博物館(大学のキャンパス全体)の案内をする企画である¹⁵。学生が主役となって取り組む活動を地域の人々に参加してもらうことで、地域貢献となる興味深い事例であるといえる。

西南学院大学博物館では、さまざまな講義における活用例がある。母体である西南学院がキリスト教主義教育を掲げていることから、博物館では神学部の講義で使用された聖書の複製や日本キリスト教史に関する資料などを所蔵している。したがって、キリスト教学、歴史系の講義で活用されている。自校史教育の場にも活用されており、「西南学院史」の講義で初回に見学され、学芸員が博物館の活動を講義で紹介している。また、2017年度から臨時開講科目「博物館の世界」がスタートし、大学博物館の資料を紹介しながら、その資料がもつ歴史的背景を解説し、資料に触ってもらいながら、学んでもらうという講義を博物館のスタッフで担当した¹⁶。そして学芸員が博物館学芸員養成課程の科目を担当していることから、講義においても大学博物館を活用している。学芸員が学内の教員による、2017年度の西南学院大学博物館の講義の活用例は32回を数える。

学芸員養成教育の整備

もうひとつの大学博物館の重要な役割は、学芸員養成の場であることである。具体的には、博物館実習の場として、そして大学によっては科目と連携をした講義の場ともなっている。学芸員養成については様々な課題が指摘されている現状があり、大学博物館が担う役割はますます重要となってきている。現在、1950年に制定された博物館法における学芸員養成の枠組みの修正がなされている。養成課程の課題がさまざま指摘されるなか一番の課題として挙げられるのは、資格取得者が約1万人いるなかで、関連した就職につくものは1パーセントに満たないという点である。この点については、これまで課程自

体は博物館の理解者を増やすことに射程をおいてもよいという考えがあったことがひとつの要因となっている¹⁷。養成課程の目的が、1950～60年代の開講当初の専門職である学芸員を育てるというものから、博物館の「理解者の養成」という言葉が70年代から登場してきたと指摘される¹⁸。2009年に文部科学省の「これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議」第二次報告書において、『学芸員養成の充実方策について』において指摘されたように、「養成課程は“博物館のよき理解者・支援者の養成の場”として位置付けるのではなく、学芸員としての必要な知識・技術を身に付けるための入り口として位置付けることが必要である」とされたことから問題意識がうかがえる¹⁹。

そうしたなかで、大学側に指摘される課題は、大学における実践からかけ離れた教育が行われていることが指摘される。学芸員養成において博物館と大学双方の意識には差異に起因することである。また、科目の読み替えの問題や、司書や教員の課程に比べて、専門科目が少ない点などが指摘されてきた。これは2009年の博物館法施行規則の改正により、4つの科目が新設されるなど、改善が図られている。さらに、まだ実現はしていないものの、学芸員養成においてより高度な養成を行うべきとの声から、「上級学芸員」や「大学院での高度専門職制度」などの新しい制度の提案もなされ、議論が続けられている。

そして、もうひとつの課題としては、実習が挙げられる。これもまた、学生を送り出す大学と受け入れる博物館側との意識の違いに起因するが、従来から実習内容にばらつきがあるという問題が指摘されていた。大学としては学生を受け入れてもらう以上、カリキュラムは博物館側に一任している。実習は学芸員養成課程で学んだことを現場で経験しながら身に付ける、集大成の場となるものである。しかし、博物館によっては、博物館の学芸業務に全く携わることができないという実習内容となっている。そこで、その状況を改善するために、2009年に『実習ガイドライン』が文部科学省から通知された。各大学はガイドラインにもとづき、カリキュラムを作成し

ている。ただしあくまでもガイドラインであるため、大学によってカリキュラムが多少異なっているものの、充実した取り組みを行っている大学もでてきている²⁰。

学芸員養成課程が抱える様々な課題に対して改善が図られているが、大学博物館の活用がこれらの課題に対して重要な役割を果たすと思われる。1995年の報告のなかでは、大学博物館の学芸員養成の教育は付随的なかたちであったものの、2009年の「学芸員充実方策について」では「大学が有する学術標本や研究資料等の資源を、博物館実習等において積極的に活用する」ことが求められている。まさにその場となるのが大学博物館である。

学芸員養成における大学博物館の役割

学芸員養成課程を開講している大学の数は、300校(2013年時点)である²¹。内訳は4年制大学291校のうち、国立大学57、公立大学20、私立大学214であり、短期大学が9校である。開講する大学は増加しており、それにともない学芸員の資格者数も年々増えている。博物館の数も増えてはいるが、資格取得者の学芸員就職率は減少しているというのが現状である。先に学芸員養成における大学博物館の重要性を指摘したが、大学博物館の数は、2015年時点で131館である²²。学芸員養成課程を開講する大学には大学博物館の設置を義務づけるべしとする声もあるなか、半数にも満たないのが現状である²³。このような状況下において、大学博物館設置を検討している大学があるなか、大学博物館が取り組んでいる事例を報告することは非常に重要なことであると思われる。

まずは、「実践的」であることが求められている、大学博物館が行う実習からみていく。大学博物館は学芸員養成教育が抱える課題である「実践的教育」に資することができるといえる²⁴。先にみた大学における実践的教育からかけ離れた教育が課題として挙げられたように、養成課程における質の向上とは「実践的な教育」を行うことが重要な要素と考えることができるだろう。実践的な教育が示す内容とは、学

芸業務を実際に体験することがひとつにある。しかし、現実として地域博物館での実習は数十人単位という多人数で行うところが多いため、限られた時間の中で企画展を開催することは非常に難しい。さらに、地域市民の公共財である博物館の所蔵資料を教育のために実習生が取り扱うことは、ほとんど不可能である。その点、大学博物館は学術標本であり、学費で購入している所蔵資料は、学生の教育に役立つべきものであり、取り扱いをさせることは可能であるといえる²⁵。

西南学院大学博物館では、博物館が所蔵する資料を活用した実習を行っており、実習の成果を発表する企画展を開催している。2017年度は、7名(他1名は別日程)の学生が実習を行い、企画展を開催している。企画展の準備の前段階として、博物館の資料を触りながら、取り扱いの注意点や情報の抽出方法などを指導する。実習の最終日には、「学芸員体験」ワークショップを開催し、実習生が学んだ学芸員の仕事を地域のこどもたちに伝え、実習生たちが企画した展覧会の案内をする。実習成果展の流れは次のとおりである。

【実習成果展の流れ】

- 資料の選定、グループにわかれてテーマの検討
- ↓
- 企画書作成、企画内容についてのプレゼンテーション
(学芸員・博物館スタッフが評価と助言)
- ↓
- 展示レイアウト作成
- ↓
- 資料の調査と解説文の執筆
- ↓
- ポスター、チラシ、パネル作成
- ↓
- 情報発信(SNS更新・ポスター等の掲示)
- ↓
- 資料とパネルの展示作業
- ↓
- 展示案内(ワークショップ「夏休み学芸員体験」)[参



2017年度実習成果展ポスター



実習の展示作業



実習生による展示案内



「夏休み学芸員体験」ワークショップの様子

加者19名(2017年度)】

そして、もうひとつは、博物館学芸員課程の科目との連携がある。有村氏によれば、大学博物館は博物館実習の場に限ることなく、科目の講義においても、長いスパンで連携を図るべきとしている²⁶。その利点としては、「大学博物館が学内の共同利用施設であることから、時間的にも手続き上も制約が少なく、より融通を効かせた取り組みを実施しやすい」ということにつきるといふ²⁷。

西南学院大学博物館は、学生が講義を受けるキャンパスとは離れたところに位置するため、学生の認知度が低いという課題を抱えている。科目との連携は、こうした大学博物館の課題の解決につながると思われる。筆者は学芸員養成課程科目「博物館経営論」「博物館資料論」「博物館情報・メディア論」を担当し、大学博物館の活動そのものを“実物”として、講義に活用している。学生と大学博物館で働くスタッフが接する機会を設け、教育普及活動担当者を講義に参加させたグループワークを行った。内容は2016年度から西南学院大学博物館の経営を学生と一緒に考えるというものである²⁸。講義では、学生がもっと大学博物館に来てもらうにはどうしたらよいかということを考えてもらった。そこで出た意見を次の特別展の取り組みに反映させた。その例としては、キャンパス内のサテライト展示がある。学生が多く集まる場所で、サテライト展示を行うことで博物館の存在を知ってもらい、足を運んでもらうこと

を目的としている。その他、学生からは美術部や写真部などの部活やサークルなどの学生団体とのコラボレーションや学園祭での宣伝など様々な案が出された。大学博物館をよりよくするための、様々な試みを話し合うなかで、来館者を増やすことの難しさや、どういう取り組みが可能なのかといった具体的な事柄を考え、博物館活動のより実践的な学びを得てくれている。学芸員課程を履修している学生は、例年、20～30人だが、グループワークを行うことによって、学年を越えた学生同士の、そして博物館スタッフと学生との関係づくりの場ともなった。受講生のなかには、博物館で雇用している学生もおり、学芸員を目指すにはどのようなステップを踏めばいいのか、情報を共有して具体的に考えることができていると思われる。

学芸員養成課程における、大学、地域博物館、自治体、学生の間で生じている様々な課題において、大学博物館が果たす役割は大きい。学芸員養成課程の教育は科目以外に、個々の大学博物館が独自に試みている。次に西南学院大学博物館の実践的な取り組みを報告する。

3. 実践的的学生教育－西南学院大学博物館の“学芸調査員制度”を例に

本章では、学芸員養成課程の範囲を超えた学生教育の取り組みである、西南学院大学博物館の“学芸調査員制度”を紹介する。学生をアルバイトとして雇用することで博物館の実務を学ぶものである。大学博物館が学生アルバイトを雇用している例は多くはなく、雇用しているところにおいても、学芸員としての実務を任せているところは限られている。他の大学博物館の学生アルバイトの業務内容としては、学生に展示室の受付、アンケートの集計、ポスターのデザイン・印刷などの仕事を担当させているところや、資料整理、展示のアシスタントを担当させているなどがある。西南学院大学博物館では、2009年から安高氏が「実務実習」と位置づけて学芸員養成に取り組んでおり、学芸員の中心的な業務

である企画展を任せている²⁹。ここでは企画展を具体例に実務実習としての学芸調査員制度について報告をする³⁰。

西南学院大学博物館の概要と活動

西南学院大学博物館(以下、博物館)は、学校法人西南学院が運営する西南学院大学を母胎とする大学博物館である。博物館は、1921年に旧制中学時代の本館として建てられた、西南学院のなかでもっと古い建物を改修し、2006年に開館した。建物は福岡県が指定する有形文化財である。博物館の建物は、大学のHPはもちろん、学院のパンフレットにも使用されるなど、西南学院のシンボリックな存在である。大学のキャンパス内では、西新に広がるキャンパスのなか、東キャンパスに位置し、学生が講義を受ける中央キャンパスからは少し離れた位置にある。東キャンパスは、一般の人も多く利用する食堂、公開講座を行うコミュニティ・センターがある一帯であり、博物館は学生よりは地域の人々を対象とする施設として位置付けられつつある³¹。

私立大学である西南学院大学は、大学である以上、地域貢献に取り組む必要はある³²。また、大学の特色を示すものとして、大学博物館の存在や、所蔵する貴重な学術標本の存在は重要であり、広報の役割も担っていることはいうまでもない³³。実際に博物館は開館以来、年に2回特別展、2回の企画展を開催、公開講演会・ワークショップの開催など、大学における地域貢献の役割を果たすことに努めてきた。来館者の8割は学外の利用者である。学生問わずすべての来館者は無料で参加することができ、8割が学外利用者である。

この成果は、大学博物館としての“学生が主役”となる取り組みを地域の人々に公開することで、社会教育の場としての役割も果たしている結果であるともいえる。活動費が学費で賄われている以上、優先順位としては学生が対象となり、彼らと取り組む事業を公開することが、地域貢献となるという認識のもと、博物館活動に取り組んでいる。

事業としての学芸員養成教育

博物館の事業において、資料収集、調査・研究、展示活動、教育普及活動の他、学芸員養成を設定している。事業の方針として、「学生が主役となる博物館。実践的な教育に取り組み、即戦力となる人材を育成する」ことを定めた。事業方針を定めたのは2017年度からではあるが、博物館では以前から学芸員養成に力を入れており、2009～2014年まで西南学院大学博物館の学芸員を務めた安高氏は、学芸員養成教育に関する様々な取り組みを行い、その取り組みを著作や論文で報告している³⁴。

その成果のもととなっているのは、学内における助成プロジェクト「大学博物館における高度専門学芸員養成事業－日中韓の大学博物館調査」(2011～2014年)、「実践力のある博物館職業人の育成事業」(2012～2016年)である。日本、中国、韓国の大学博物館を調査し、組織と活動の実態を調査した。そして、大学にどのような学芸員養成の教育を求めるのかを現役の学芸員たちに聞き取り調査を行った(筆者は2013年に調査のメンバーに加わった)。その調査のスタッフとなったのは、西南学院大学に所属し、博物館で臨時職員として雇用されていた大学院生たちである。調査において学芸員の生の声を聞くことは、実践的な経験を積むことにつながった。博物館や自治体の文化財課に就職するものも出てきており、着実な成果を上げている。

実務実習としての学芸調査員制度

現在の博物館の組織は、館長(教授学部兼任)1名、事務員1名、学芸員(肩書きは「博物館教員(助教)」)1名がおり、その下に臨時職員として学芸研究員2名と学芸調査員5名がいる(2017年度)³⁵。2006年の開館以来、西南学院大学の大学院生を臨時職員として雇用しており、その総数は20名を超える。学生によって在職期間は異なるが、2年前後務めるものが多い。2014年度に臨時職員の体制が改められ、「学芸研究員」(以下、研究員)「学芸調査員」(以下、調査員)が誕生した。組織改正にともない、学芸員が事務職から教員職へと変わり、講義を担当することに

なった。そして、新しく誕生した職である研究員は、学芸員とともに博物館業務を担当し、調査員を指導する。それまでは、一律の学生の臨時職員であったのに対し、学生アルバイトが中心となる調査員と学芸員との間に位置づけることで、学芸員の業務負担軽減と調査員の効率の養成という構図となっている。研究員となるものが、それまで臨時職員の1人に過ぎなかった立場から、その他の臨時職員をまとめる立場となることで、業務の指示系統が生まれ、指導する立場としての責任感を生むことにつながった。研究員は調査員のなかから選抜しており、大学院を修了し、学芸員の資格も取得し、一般的な学芸員の採用条件を満たしていることが望ましい。現在では2名が雇用されている。

調査員は学内で公募し、西南学院大学の学部生3年生以上から大学院生を対象として現在は5名の調査員(大学院生2名・学部生3名)を雇用している。彼らは大学博物館の活動をともに行う仲間であると同時に、博物館が教育を取り組む対象でもある。調査員は、受付、電話などの来館者対応、統計データの記録・編集などの事務仕事から、温湿度の記録、HP・SNSの更新などの情報発信、ニュースの原稿執筆、ポスター作成などの学芸業務の基本を学ぶ。そして、博物館の基本的な機能である展覧会の経験を積むために、企画展を任せている。

学芸員養成企画展シリーズ

博物館の展覧会事業には「常設展」「特別展」「企画展」がある。常設展では聖書とキリスト教の歴史と、日本キリスト教史の資料を展示しており、定期的に部分的な展示替えをおこなっている。特別展は学芸員と研究員が中心となって年に1～2回開催をする。そして、企画展は特別展より小規模な展覧会であり、パネルを中心としたものである。2010年度からおこなわれ、1～2名で担当し、パネルだけでなく数点の資料を展示することもある。企画展のテーマは、博物館の使命・方針にもとづき、調査員が関心をもつことをテーマに設定する。過去には「シーボルトのみた日本宗教」(2014年)、「江戸・明

治時代の異国人イメージ」(2015年)などがある。パネルを中心とした企画展の場合は、他館や自治体から画像利用の申請を行うなどの、学芸業務を経験することとなる。博物館の資料、もしくは図書館の資料を展示する場合もあり、資料の取り扱いから、照明の当て方まで様々なことを学んでもらう。一連の流れをまとめると以下のとおりである。

【企画展の流れ】

企画書の作成

(学芸員・研究員に相談しながらテーマを設定)

↓

企画をプレゼンテーション、学芸員による助言・修正指示

↓

パネル画像・展示資料の確定

展示レイアウト案の作成

展示パネル作成・ポスター作成

↓

設営・展示

↓

関連イベント(ワークショップ)

ここでは具体例として2016年度の2つの企画展を紹介する。ひとつは、西南学院大学大学院の文学研究科フランス文学を専攻する研究生が企画した「はかたの技と信仰——博多織と博多人形から——」(会期 2016年8月17日～10月31日)、もうひとつは同大学院国際文化研究科で考古学を専攻する大学院生が企画した「キリシタンの墓をみつめる」(2017年1月24日～5月31日)である。2015年度までは、特別展の内容を考慮した、特別展では取り上げない地域文化や学院史に関連したテーマを設定するようしていたが、2016年度からはテーマ設定を一から調査員に任せ、企画書を提出させて行っている。

【はかたの技と信仰——博多織と博多人形から——】

福岡の博多伝統工芸と信仰に焦点を当てた展覧会である。担当した調査員が博多の伝統工芸に関心を

もち研究テーマとしていたことから、当館のキリスト教文化に関する調査・研究という点と関連させて、キリスト教の信徒である2名の博多伝統工芸士が制作した祭具を展示した。あわせて、伝統工芸の歴史のなかで、キリスト教以外の宗教も装飾モチーフとなってきたことを解説し伝統工芸と宗教の関係を紹介した。企画には、はかた伝統工芸館(福岡市博多区上川端町)にご協力をいただき、伝統工芸士に取材をすることができた。また展示資料として博多織を博多織デベロップメントカレッジから寄贈いただいた。調査員は学芸員の指導のもと、学外の機関との交渉や書類の作成から展示まで一連の展覧会における実務を経験した。また、担当調査員の希望により講師を招いたワークショップも行った。西南

学院大学博物館としては、大人向けの企画は初めてのことであり、調査員の提案により実現したものである。

本企画展は、調査員の教育という点だけではなく、様々な成果があったといえる。学生教育の点からみれば、企画展、ワークショップは、学生の経験となることはもちろん、こうした成果である展覧会を地域の方々にみていただくことで、地域貢献となる。そして、大学博物館としても調査員の提案を受けて新しいことに取り組んでいくことで、博物館としての成長にもつながっている。

【キリシタンの墓をみつめる】

日本のキリスト教徒の墓に焦点を当てた展覧会で



ポスター



寄贈していただいた資料で触れる展示



ワークショップ「博多織で博多おきあげをつくろう」(参加者16名)



展示風景

ある。担当した大学院生は考古学を専攻し、そのなかでもキリシタン墓を研究対象としている。その研究成果をもとにパネル企画展を行った。内容は江戸幕府によるキリシタンの取り締まりが本格化する前に造られた16～17世紀のキリスト教徒の墓について考古学視点から取りあげたものである。キリシタン墓は全国の自治体が管理しており、そのなかには国指定の史跡となっているものもある。パネル作成にあたって、調査員は画像を借用するために、自治体の担当者に連絡をして申請手続きを行うなど、展覧会の一連の業務を経験した。

2018年度からは今まで取り組んできた学生が主体となる企画展をシリーズ化し「学芸員養成企画シリーズ(仮)」とする予定である。これまではパネルが中心ではあったが、回を重ねるなかで、企画展は充実してきている。そこで、もっと目に見えるかたちで担当した調査員の実績として残るように図録

を刊行することを計画している。監修に学芸員が入り、執筆指導をしながら、展覧会が一番大変な作業である図録制作においても一連の作業を経験させることにしている。現在の学芸調査員制度は、着実に成果を上げているといえるが、いまだ課題は多い。展覧会を担当させるにあたって、現在の制度では調査員には調査などの出張をする資格がない。以前は学内の研究助成に応募し、プロジェクトとして学生スタッフを派遣していたが、現在では学内の制度上プロジェクトを立ち上げることはできない。また学芸員が任期制での職であることも、調査員制度を発展させていくにあたっての取り組みを行うことを難しくしている。

今後、“学生が主役”となる博物館の取り組みを続けて発展させていくためには、学内外に博物館の取り組みを積極的に発信していくことが重要であろう。



ポスター



展示風景

おわりに

大学博物館の役割である学生教育について、大学博物館の歴史や現在の状況をふまえて、西南学院大学博物館を事例としてみてきた。大学博物館が取り組む学生教育、とくに学芸員養成教育において、筆者はさまざまな可能性があると感じている。それはともに働く学芸調査員や課程の科目を履修している学生たちからの影響が大きい。学芸員課程を履修する学生には、学芸員を目指すもの、もしくは博物館に関心がある、もしくは公務員になるために文化行政について知っておきたいなど、さまざまな理由がある。しかし、講義に取り組む姿勢は、皆同じであり、グループワークに取り組ませると真剣に意見を述べ、提案をしている。彼らに学芸員課程科目の講義でどのような教育を受けたいか尋ねてみたところ、「展覧会やワークショップを企画してみたい」、「ミュージアムトークの練習をしてみたい」などの声が多かった。受講理由はそれぞれではあるが教育を受ける側の学生も実践的な経験を望んでいると強く感じた次第である。そのような彼らの意見に耳を傾けながら、大学博物館ではどのような教育が可能なのか、考えていくことが大事であると感じている。

大学博物館のこうした学生教育を使命とすることは、大学博物館の存在意義を確認することでもある。地域博物館とは異なる使命をもつことを自覚し、学生に向けた活動の結果が、地域への貢献となることを意識することが大事ではないだろうか。地域博物館が地域住民に親しまれ、地域の拠点となることを目指しているように、大学博物館であれば、学生から親しまれ、学生教育の拠点となることを目指していくことが大学博物館のひとつの在り方だと思われる。

註

1 大学博物館の歴史と定義については以下を参考。『博物館学事典』倉田公裕監修、東京堂出版、1996年。西野嘉章『大学博物館－理念と実践と将来と』東京大学出版会、1996年。安高啓明『歴史のなかのミュージアム』昭和堂、2014年。『日中韓博物館事情－地域博物館と

大学博物館－』高倉洋彰・安高啓明編、雄山閣、2014年。
 2 棚橋源太郎『学校博物館問題』『博物館研究』第3巻、第2・3号、1930年(青木豊編『棚橋源太郎 博物館学基本文献集成 下』所収、雄山閣、2017年、48-55頁)。
 3 熊野正也『大学博物館のあるべき姿への一試論』『Museum Study』第3号、1992年、7-24頁。黒沢浩『大学博物館における教育活動－生涯学習と大学教育のかかわり－』『明治大学博物館研究報告』第2号、1997年、3-17頁。
 4 大学の社会貢献については以下を参照。『大学開放論－センター・オブ・コミュニティ(COC)としての大学』出相泰裕編、大学教育出版、2014年。野澤一博『高等教育機関(大学・短期大学・高等専門学校)における社会・地域貢献活動』文部科学省科学技術・学術政策研究所、2014年。
 5 野澤、同7頁を参照。
 6 藤田久仁子『地域と融合した住民参加型「大学開放」の実践と可能性－地方国立大学博物館の実践例から』『北海道大学大学院教育学研究紀要』第116号、129-140頁。
 7 地域博物館と大学博物館の目的や所蔵する資料における相違について、以下のような指摘がある。西野氏によれば、「大学(University)と博物館(Museum)、これらの二つの施設・組織の臨界域に位置する大学博物館は、ある特定のテーマに即して資料を個別的ないし網羅的に収集し、それらを整理し、保存し、研究し、公開することを主な業務とする一般の博物館と似て非なるもの。なぜなら、大学博物館は学問の体系に則って収集された学術標本コレクションを恒久的に保存・管理する保管施設であると同時に、学内の教育研究を支援する基盤施設であり、かつまた先端的な知と情報を創出・発信する戦略施設だからである」(西野、前掲書2頁)。安高氏によれば、「地域博物館と大学博物館の“資料”を考えた場合、文化財か学術標本という考え方が常に存在し、ここが根本的な史料に対する概念の相違である。(……)地域博物館では無用なモノであっても、大学博物館では学術標本となりえる博物館資料が数多く存在しているのである」(安高、『歴史のなかのミュージアム』235頁)。
 8 前田厚子『大学ミュージアムによる多様な創造環境－歴史都市の持続的発展における芸術系大学の社会的役割－』『文化経済学』第13巻、第1号、2016年、45-61頁。
 9 第三に情報創出・発信センターの役割、第四には展示・公開施設としての役割。(西野前掲書、30-33頁を参照)。
 10 安高、『日中韓博物館事情』92-97頁。
 11 黒沢浩『大学博物館論』『学術資料の文化資源化』黒沢浩編、南山大学人類学博物館、2011年、5-16頁。
 12 有村誠『金沢大学資料館の学芸員養成プログラムにおける取り組み－大学博物館の原風景－』『金沢大学資料館紀要』第10号、2015年、35頁。
 13 安高前掲書、237-239頁を参照。
 14 黒沢浩『大学博物館における教育活動－生涯学習と大学教育のかかわり－』『明治大学博物館研究報告』第2号、1997年、3-17頁。
 15 山本珠美『学生主体の地域貢献－香川大学博物館におけるミュージアム・レクチャーの取組－』『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』第17号、2012年、31-46頁。
 16 全15回の講義を、館長(1回)、学芸員(4回)、学芸研究員2名(10回)で担当した。講義の内容は、導入として大学博物館の歴史と概要、文化財である博物館の建物について話し、講義前半は主要なコレクションである「ジュダイカ(ユダヤ教の祭具)」「キリスト教文化」「日本キリスト教史」「聖書植物園」「地域文化」の資料に関する講義を行った。後半は教育普及活動を担当する学芸研究員が担当し、子供向けのワークシートの制作をグループワークとして行った。2017年度の履修者は26名で、経済学部や文学部など、さまざまな学部からの履修登録があった。

- 17 2008～9年に実施された大学、博物館、自治体、企業、団体に対するアンケートによる意識調査において、学芸員養成課程における到達目標では、「即戦力の養成」が32.8%、「理解者の養成」が52.6%であった。(平成20年文部科学省委託事業『大学における学芸員養成課程及び資格取得者の意識調査報告書』丹青研究所、2009年、12頁。)
- 18 金山喜昭「大学における博物館学芸員の養成の現状と課題」『法政大学資格課程年報』第3号、2013年、25-34頁。
- 19 『学芸員養成の充実方策について(第2次報告書)』文部科学省、2009年、3頁。
- 20 独自の充実したカリキュラムを組む大学も出てきている。例として、浜田弘明「博物館実習の現状と課題—『博物館実習ガイドライン』を中心に」『全協研究紀要』第18号、2015年、1-16頁。
- 21 「学芸員養成課程開講大学一覧(平成25年4月1日時点)」文部科学省ホームページhttp://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/gakugei/(2018年2月1日参照)
- 22 「平成27年度博物館館数関連統計」『博物館研究』日本博物館協会、第52号、2017年、13頁。
- 23 熊野正也「大学博物館のあるべき姿への一試論」『Museum Study』第3号、1992年、21-22頁)。安高、前掲書92-97頁。
- 24 学芸員養成課程の意識調査において、大学が組むカリキュラムに対して、自治体職員からは理論よりも実践を重視した内容を望む声があった。(『大学における学芸員養成課程及び資格取得者の意識調査報告書』107-108頁。)
- 25 『博物館実習ガイドライン』(2009年、文部科学省)には学内実習における「実務実習」とは、「学内の実習施設等において資料の取り扱いや収集、保管、展示、整理、分類等の方法、調査研究の手法等について学ぶことを目的とする」。そのため大学は、「学内実習のための施設(博物館実習室など)・設備・備品を自ら責任を持って確保することが必要」であり、「学内の付属博物館等を活用することが望ましい」とされる。
- 26 有村前掲論文、27-36頁。
- 27 同29頁を参照。
- 28 取り組みの詳細は、同書に所収される山尾論文「博物館学芸員養成課程との連携—学生と考える、学生のための西南学院大学博物館—」において報告している。
- 29 安高『歴史の中のミュージアム』において「学芸員実務実習」(215-216頁)、『日中韓の博物館事情』において「実践教育」(124-125頁)で紹介される。
- 30 山尾彩香「大学博物館の使命としての教育普及活動——せいなんこどもワークショップ事例紹介と課題——」『西南学院大学博物館研究紀要』第5号、9-31頁。
- 31 大学博物館の設立経緯については、『西南学院大学博物館の主要資料目録』(2016年)に詳しい。大学博物館の位置づけについては、学校法人西南学院総務部企画課『学校法人西南学院 ビジョンと中長期計画 2016-2025』を参照。2018年4月からは西南学院の総合企画部のなかに組織改編される。
- 32 私立大学の公共性については『IDE(481)9-13頁、2006年』を参照。
- 33 たとえば、日本私立大学連盟発行『大学時報』には、巻頭において「だいがくのたから」が紹介されているが、歴史ある建物であることもあれば、貴重な学術標本を紹介しているところもある。大学によっては重要文化財に指定されているものも、大学が誇りをもって紹介できる貴重な資料が大学にとって重要であることを感じさせる。
- 34 安高氏の著作については註1を参照。
- 35 これまでの組織や活動報告については『西南学院大学博物館年報』第1号～9号を刊行。

内島 美奈子(うちじま みなこ) 西南学院大学博物館学芸員